

19 日本史にみる主要な合戦・乱・変・抗争等

(＊印は土屋氏に関するもの、○は勝者、●は敗者)

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
原 始	倭国の乱			2世紀中頃倭国では大乱がありましたが、3世紀ごろには耶馬台国の女王卑弥呼とする国家連合が成立しました。
大和	吉備の乱 463～ 464			吉備田峽は任那の国司に任ぜられると、任地で乱を起こしました。
	磐井の反乱 527	継体天皇 物部麤鹿火	筑紫国造磐井	新羅と連絡して乱を起こしました。これにより物部氏の勢力増大の契機となりました。(注) 麤鹿火(アラカヒ)
	皇室の争い 531	欽明天皇 (蘇我氏)	安閑・宣化 天皇(大伴・ 物部氏)	
	蘇我・物部氏 の対立 587	蘇我馬子	物部守屋 中臣氏	仏教崇拝を可とする蘇我氏と、否とする物部氏との争い。
	壬申の乱 672	大海人皇子 (天武天皇)	大友皇子 (弘文天皇)	天智天皇の死後、天皇の弟大海人皇子と天皇の子大友皇子が皇位継承をめぐって争いました。天武天皇は大和の飛鳥浄御原に即位し、皇権が強化され律令体制の完成期に入りました。
奈良	長屋王の変 729	藤原氏	左大臣長屋王 (天武天皇の 孫)	長屋王は、藤原氏の権力伸張にとって第一の障害となった権勢家でした。不比等の娘光明子を皇后に立てることに反対し、宇合に攻められ自殺しました。これにより藤原氏は権勢を誇ったが疫病流行のため後退しました。
	藤原広嗣の乱 740	橘諸兄	藤原広嗣	諸兄に左遷された広嗣は、家運回復のため玄昉や真備を除こうとして太宰府に兵を挙げましたが鎮圧されました。この乱後玄昉や真備は世論の支持を失って失脚しました。 (注) 玄 昉(ゲンボウ)
	橘奈良麻呂の 乱 757	藤原仲麻呂	橘諸兄	聖武天皇の死後の争いでした。

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
奈良	恵美押勝の乱 764	僧 道鏡 (孝謙上皇の 信任者)	恵美押勝 (仲麻呂)	両者の政権争いでした。
	道鏡皇位事件 769	藤原百川 和気清麻呂 和気広虫	道鏡	道鏡は太政大臣・禪師・法王に任ぜられて、完全な僧侶政治を行い、ついに天皇の地位に昇ろうとしました。この乱により藤原氏の権勢が再確立しました。
	蝦夷の反乱 774			774年ころ始まったこの反乱は、780年伊治公・皆麻呂(アジマロ)が多賀城を占領するにおよんで最高頂に達しました。この鎮圧は、平安初期の坂上田村麻呂の蝦夷征討を待たねばならず、後の兵制改革の原因ともなりました。
平安	薬子の乱 810	嵯峨天皇 藤原冬嗣 蔵人頭	藤原薬子	薬子は兄仲成とともに嵯峨天皇の新政に不満な貴族や寺院と結んで、平城天皇を再び位につけ、旧都平城京の復活を計りました。冬嗣は皇室の外戚となり、中央政界に進出しました。
	承知の乱 842	藤原良房	伴 健岑 橘 通勢	藤原氏の中央政界への進出が確固たるものになりました。
	応天門の変 866	藤原良房	伴 善男	応天門の火災を契機に伴を失脚させました。これで大伴氏・橘氏の対藤原氏勢力を一掃しました。
	阿衡事件 888	藤原基経	橘 広相	
	安和の変 969	藤原実頼	源 高明	これにより藤原氏は、他氏の排斥を完了しました。
	承平の乱 935～ 939 平将門の乱 940	平 将門 平 貞盛 藤原秀郷	平 国香 平 将門	律令体制の矛盾を反映して地方武士団の統合とその存在意識を示しました。 (関東にて)
	天慶の乱 (藤原純友の)	源 経基 小野好古	藤原純友	

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
平安	乱) 939 ～941			(西海にて)
	平忠常の乱 1028	源 頼信	平 忠常	律令体制の矛盾を反映して地方武士団の統合とその存在意識を示しました。 (上総にて)
	前九年の役 1051～ 1062	源 頼義 源 義家 清原氏	安倍頼時 安倍貞任 安倍宗任	安倍氏が奥羽地方で国司に抵抗しました。以後源氏の勢力が東国に扶殖しました。
	後三年の役 1083～ 1087	源 義家 奥州藤原氏	清原氏	清原氏の内部争いから再び奥州が乱れました。これにより奥羽地方は奥州藤原氏の勢力範囲となりました。
	保元の乱 1156	後白河天皇 〔藤原忠通〕 〔源 義朝〕 〔平 清盛〕	崇徳上皇 〔藤原頼長〕 〔源 為義〕 〔源 為朝〕 〔平 忠正〕	皇位の継承をめぐる対立と、藤原氏の内部対立(摂関家の対立)をめぐり乱が起きました。これにより武士が中央政治に参加する端緒を作りました。
	平治の乱 1159	平 清盛 藤原通憲	源 義朝 藤原信頼	武家勢力の争いで、藤原氏の内部対立と絡めてこの乱が起きました。これにより源氏の勢力が後退し、平氏の政権が確立しました。
	宇治の合戦 1180	平 宗盛 (平家一門)	源 頼政 以仁王	平氏は武家の棟梁の出でありながら、地方武士の在地領主制を否定する荘園的土地所有制を引き継ぎ、自らはその領主として貴族化し、旧支配階級や地方武士団の反感を買いました。 宇治の合戦から始まり、壇の浦の合戦まで源氏と平氏の戦(いくさ)が続きました。
	※ 石橋山の合戦 1180	平氏	源 頼朝 北条時政 以仁王 (土屋氏)	
	※ 富士川の合戦 1180	源氏 (土屋氏)	平氏	
	※宇治・瀬多 の合戦	源 範頼 源 義経	源 義仲	義仲は頼朝に呼応して木曾に兵を挙げ、1183年京都に攻め入ったため平氏は安徳天皇を奉じて西に逃れました。

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
平安	1184	(土屋氏)		しかし、義仲は武士相互の反目及び院政の強化を計る後白河院の策謀によって、源頼朝に討たれました。
	※ 一の谷の合戦 1184	源 範頼 源 義経 熊谷直実 土肥実平 (土屋氏) 等	平 忠度 (平家一門)	義経は京に在し、頼朝の推挙を待たず檢非違使・左衛門少尉に任官したことが頼朝の命令に背くものとして、平家追討に任ぜられませんでした。また、その後太夫判官の地位につき、昇殿を許されました。これは法皇が兄弟を離間させ、義経を自らの手兵とする懐柔策であったのです。
	※ 屋島の合戦 1185	源 範頼 三浦義澄 和田義盛 源 義経 梶原景時等 (土屋氏)	平 宗盛 平 知盛	(注) 義経の「ひよどりごえ」(鶴越)は、あまりにも有名な話です。 神戸・六甲山地の山路で、義経が福原の平氏を襲撃しようとし、鷲尾三郎を先導として越えた難所です。
	※ 壇の浦の合戦 1185	同 上 (土屋氏)	同 上	この乱により平氏を滅亡しました。この時安徳天皇は平氏一族とともに入水しました。
	高館の合戦 1187	藤原泰衡	源 義経	義経は腰越で頼朝に愁訴しましたが認められず、ついに頼朝に追われる身となり、奥州に逃れましたが、泰衡により殺されました。頼朝は平泉に入り、泰衡は従郎に殺され藤原氏は滅亡しました。
鎌倉	梶原景時の乱 1199	北条時政	梶原景時	北条氏の独裁が強化されて、御内方と外様との対立が激化しました。 〔北条九代記 巻第四(九)〕 〔吾妻鏡 建暦3年5月〕
	比企能員の乱 1203	北条時政 北条政子 北条義時	比企能員 源 頼家	
	※ 和田義盛の乱 1213	北条義時	和田義盛 (土屋・三浦・土肥等の御家人)	

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
鎌倉	三浦泰村の乱 1221	北条義時	三浦泰村	
	承久の乱 1221	北条義時	後鳥羽上皇	内紛により幕府の自滅を期待した王朝は、義時の強硬策に動揺し、討幕勢力は追いつめられ、守護・地頭の権勢に不満を抱く荘官・名主・諸大寺の僧兵・西面の武士ら6万を集めて立ち上がりました。 義時は遠江以東の諸国の兵19万余をもって攻め上り木曾川・宇治勢多の戦いで勝利を収めました。
	北条光時の乱 1246	北条時頼	北条光時	5代執権時頼を除こうとして、頼経を奉じて乱を起こしました。これにより、時頼は独裁化を進めました。
	文永の役 1274	北条実政	〔元〕	日元関係の悪化が相次ぎ発生しました。特に、西日本の漁民が、高麗沿岸を掠奪する事件が相次いで起こりました。
	弘安の役 1281	北条実政	〔元〕	日元関係の悪化が相次ぎ発生しました。特に、西日本の漁民が、高麗沿岸を掠奪する事件が相次いで起こりました。
	正中の変 1324	北条高時	土岐頼兼 多治見国長 日野資朝 後醍醐天皇	討幕の計画を進めましたが、計画がもれてしまいました。
	元弘の変 1331	北条高時	日野資朝 俊 基 護良親王	延暦寺・興福寺などの寺社勢力を、結合するために計画しましたが、吉田定房の密告により失敗しました。
	※ 4月3日 の合戦 1333	後醍醐帝 西国武士団 足利高氏	北条六波羅 (小早川・ 土屋氏)	悪党と呼ばれた各地の在地土豪の動きは、次第に内乱の兆しを見せていました。 元弘の変は失敗に終わりましたが、各地の豪族や武士たちは天皇に応じて挙兵しました。(足利氏・新田氏・楠木氏等)
	※ 分倍河原 の合戦 (1333・5・16)	新田義貞 (三浦・ 土屋氏)	北条高時	〔太平記 巻の八〕 〔太平記 巻の十〕

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
鎌倉	※鎌倉合戦 (1333・5・18~ 22)	新田義貞 (三浦・土屋氏)	北条高時	(鎌倉幕府の滅亡)
南北朝	中先代の乱 1335	足利尊氏	北条時行	時行は殺されました。護良親王も殺されました。 建武の乱・北条時行の乱ともいわれています。
	※山崎の戦 ※湊川の戦 1336	足利尊氏 (小早川・ 土屋氏)	楠木正成 新田義貞 (土肥氏)	戦死しました。(河内の土豪) 京都に退去しました。(源氏の名門)
	※ 金ヶ崎の戦 1338	足利尊氏 (小早川・ 土屋氏)	新田義貞 (土肥氏)	戦死しました。
	※新田義興の 乱 1352 ~1358	足利尊氏 (小早川・ 土屋氏)	新田義興 (土肥氏)	戦死しました。
室町	※ 明德の乱 1391	足利義満	山名氏清 (土屋氏)	中国地方11ヶ国の守護山名氏に干渉し、山名氏清は挙兵 しましたが、勢力を失い、敗死しました。
	[南北朝の 統一] 1392	足利義満		南朝の後亀山天皇に申し入れ、南北朝の合一が成り、幕府 の基礎を固めました。この時、細川氏・大内氏は六国守護 を兼ねることになりました。
	※ 応永の乱 1399	足利義満 畠山氏	大内義弘 (土屋氏)	大内氏は関東管領足利満兼と東西相呼応して、挙兵しまし たが討滅されました。
	※ 上杉禪秀の乱 1416	今川範政 上杉房方	足利義嗣 上杉禪秀	4代将軍義時・関東管領足利持氏に不満を抱いた弟義嗣 は、禪秀に謀反を説いて、鎌倉府を襲いました。 (この頃から、土屋氏は土屋から去っていったと思われま す。)
	永享の乱 1439	足利義教	足利持氏	持氏が将軍への野望を抱きましたが失敗しました。関東管 領足利持氏が殺されたため、幕府の東国支配の弱体化が進 みました。
	嘉吉の乱 1441	赤松満祐 山名宗全	足利義教 赤松満祐	将軍義教の専制政治は、幕府内部に反対の機運を巻き起こ し、満祐父子は将軍義教を殺し、のちに満祐は自殺しまし

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因																																							
室町				た。																																							
	応仁の乱 1467～ 1477	細川勝元 (東軍) (38～48才) 山名持豊 (宗全) (西軍) (64～74才)	応仁元年 (1467) 両党がまず激戦になりました。また、足利・畠山・斯波家の相続争いが起き、両派に頼ってきたこともあり、これにより戦乱は全国的に波及し、乱は次第に地方へと拡大していきました。幕府は無力化し、荘園が解体され、守護大名に代わって、新しい実力者が進出しました。ここから戦国100年の争乱期が始まりました。																																								
	(戦国の世) 下剋上・群雄割拠・大名領の形成 <table><tr><td>【大名】</td><td>【滅亡者】</td><td>【大名】</td><td>【滅亡者】</td><td>【大名】</td><td>【滅亡者】</td><td>【大名】</td><td>【滅亡者】</td></tr><tr><td>細川政元</td><td>畠山政長</td><td>北条早雲</td><td>上杉憲政</td><td>今川義元</td><td>斯波氏</td><td>斉藤道三</td><td>土岐氏</td></tr><tr><td>三好長応</td><td>細川氏</td><td>* 武田信玄</td><td>小笠原氏</td><td>織田信長</td><td>斯波氏</td><td>大内義隆</td><td></td></tr><tr><td>伊達輝宗</td><td>最上・南部氏</td><td>上杉謙信</td><td></td><td>浅井久政</td><td>京極氏</td><td>毛利元就</td><td>大内氏</td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td>朝倉義景</td><td>斯波氏</td><td>毛利元就</td><td>陶・尼子氏</td></tr></table> 【大名】 長曾我部元親 【滅亡者】 細川氏 島津貴久				【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】	細川政元	畠山政長	北条早雲	上杉憲政	今川義元	斯波氏	斉藤道三	土岐氏	三好長応	細川氏	* 武田信玄	小笠原氏	織田信長	斯波氏	大内義隆		伊達輝宗	最上・南部氏	上杉謙信		浅井久政	京極氏	毛利元就	大内氏					朝倉義景	斯波氏	毛利元就
【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】	【大名】	【滅亡者】																																				
細川政元	畠山政長	北条早雲	上杉憲政	今川義元	斯波氏	斉藤道三	土岐氏																																				
三好長応	細川氏	* 武田信玄	小笠原氏	織田信長	斯波氏	大内義隆																																					
伊達輝宗	最上・南部氏	上杉謙信		浅井久政	京極氏	毛利元就	大内氏																																				
				朝倉義景	斯波氏	毛利元就	陶・尼子氏																																				
	川中島の戦い 1555			武田信玄と上杉謙信は、天文22年 (1553) 以来数回戦いました。																																							
	桶狭間の戦い 1560	織田信長	今川義元	義元は、この時戦死しました。																																							
	姉川の戦い 1570	織田信長	浅井長政 朝倉義景	信長は、この時浅井長政を破りました。																																							
	※ (三河野田城 攻囲) 1573	織田信長	武田信玄 (土屋氏)	信玄は野田城を攻囲中に死没しました。																																							
	(室町幕府の 滅亡) 1573	織田信長	足利義昭	室町幕府は、足利将軍第16代目でその幕を閉じました。この時、浅井・朝倉の両氏が滅びました。																																							

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
安土 ・ 桃山	※長篠の戦い 1575	織田信長	武田勝頼 (土屋氏)	信長軍は、鉄砲隊を使用して武田勝頼を敗退させました。
	中国征伐 1578	織田信長 羽柴秀吉	毛利輝元	この頃、毛利氏は尼子氏を滅ぼしました。 (勝久26才中山鹿之助39才)
	本能寺の変 1582	明智光秀	織田信長	信長は、本能寺において自殺しました。 この頃、武田氏は滅びました。(勝頼37才自殺)
	山崎の合戦 1582	羽柴秀吉	明智光秀	この戦いは、羽柴秀吉の天下取りへの第一歩となりました。
	賤ヶ岳の戦い 1583	羽柴秀吉	柴田勝家 織田信孝	勝家は、越前北の庄にて自殺をしました。 この頃、秀吉は大阪城を修築しました。
	小牧・長久手の戦い 1584	羽柴秀吉	織田信雄 徳川家康	両者は、和睦をしました。
	四国征伐 1585	羽柴秀吉	長曾我部元親	元親を倒した秀吉は関白となり、翌年に太政大臣になって、豊臣の姓を賜りました。
	九州征伐 1587	豊臣秀吉	島津義久	九州を平定した秀吉は、聚落第を築造し、翌年天皇の行幸を仰ぎました。 北野大茶会
	小田原征伐 1590	豊臣秀吉 徳川家康	北条氏政 伊達氏	氏政は自殺して、小田原北条氏はその幕を閉じました。東北の雄伊達氏は和睦しました。家康は関東に移封され、江戸城に入りました。これにより、秀吉の全国統一が成りました。
	文祿の役 1592	豊臣秀吉		秀吉は、諸将を朝鮮に出兵させました。
	碧蹄館の戦い 1593			この頃(1594)に、秀吉は伏見城(桃山)に移りました。
	慶長の役 1597	豊臣秀吉		秀吉は、再び朝鮮に出兵させました。1598年秀吉は醍醐に花見をして、その後8月63才で死にました。外征の諸将は召還されました。

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
江戸	関が原の戦い 1600	徳川家康 (東軍)	石田三成 小西行長等 (西軍)	武断派(武将党)と文治派(文吏党)の対立により、起こりました。この時、小西行長等は斬られました。これにより家康の地盤が固まりました。1603年家康は征夷大將軍となり、江戸幕府を開きました。譜代大名・外様大名(表大名)・旗本衆などが生まれました。
	大阪の陣 1614～ 1615	徳川家康	豊臣氏	豊臣秀頼は、京都方広寺大仏殿の鐘を鑄造しました。大阪冬の陣が起こりました。また、翌年には、大阪夏の陣が発生し、秀頼(23才)・淀君(49才)は自殺し、豊臣氏は滅亡しました。これにより、家康は名実ともに全国制覇をなし遂げました。
	紫衣事件 1629	徳川家康	沢庵和尚等	沢庵等は出羽等に配流しました。 家康は1607年から1619年にかけて、徳川御三家(尾張家・水戸家・紀伊家)を設けました。これにより、幕藩体制が確立し、諸藩の文治政治も確立しました。また、1635年には、参勤交代制を確立し、寺社奉行も設置しました。
	島原の乱 1637～ 1638	板倉重昌 松平信綱	松倉重政 他1万数千人	藩財政の膨張を呼ぶ諸事業に手を出した松倉氏は、農民に重税をかけ苛政(過酷な政治)を冒しました。さらに1634年に凶作が襲い、社会不安が増しました。天草四郎(益田時貞)を盟主に3800人が蜂起し、島原城を包囲しました。
	由比正雪の乱 1651		由比正雪	楠木流の兵書を学び、江戸で兵学を講じ、丸橋忠弥と討幕を計り、計画が漏れ自刃しました。慶安の乱ともいわれます。
	江戸明暦の大火 1657			江戸城本丸焼失(翌年再建)
	寛文二大美事 1663～1665			殉死を禁ず・大名の人質を廃す。
	蝦夷の叛乱 1669	松前矩広	蝦夷	蝦夷の叛乱を平定しました。
	松の廊下事件 1701	吉良義央	浅野長矩	江戸城の殿中松の廊下において、刃傷事件が発生し、加害者の長矩は即刻切腹となり、これが機となり赤穂浪士の仇討ちへと発展しました。

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●		要 因
江戸	[享保の 改革] 1716~1745	8代將軍吉宗は、新井白石の文治主義を退け、武芸を奨励し儉約に努め、財政収入の増大を図るなど、幕府の改革を行いました。		
	宝暦事件 1758		竹内式部	幕政批判と尊王論が相次いで発生し、式部を重追放に処しました。
	明和事件 1767		山県大式 竹内式部	田沼意次が御用人となり、大式は獄門、式部は八丈島へ流刑となりました。
	[寛政の 改革] 1789~1793	11代將軍家斉の時、老中松平定信は、享保の改革を手本にして田沼時代の乱れた政治の改革をしました。		
	大塩平八郎 の乱 1837		大塩平八郎	藩政の行き詰まりにより、各地で乱が発生しました。 平八郎の乱（大阪）・生田万の乱（越後柏崎）等
	[天保の 改革] 1841~1843	大塩平八郎の乱の影響として全国蜂起が見られ、その一揆の性質はかなり複雑な内容を持ちつつあり、封建社会の政治の本質に触れはじめようとしていました。12代將軍家慶の時の1841年に老中水野忠邦は享保・寛政の改革にならって幕政の改革を行いました。		
	安政の大獄 (1859)	井伊直弼	徳川斉昭 吉田松陰等	1853年に米使ペリーが浦賀に来航し、翌年には日米和親条約（神奈川条約）、日英・日露和親条約が締結されました。それに加え1858年には、5ヶ国（米・蘭・露・英・仏）との間に、日米修好通商条約が締結され、また、その違勅問題は、各方面に井伊打倒の声を生みました。 斉昭蟄居・慶喜隠居・松陰刑死（30才）・直弼害死（46才）
	桜田門外の変 1860	勤王派の 水戸浪士	井伊直弼	
	外人殺傷事件 1861	開国に対する反対が高まり、水戸浪士によって品川のイギリス公使館が襲われました。		
	坂下門外の変 寺田屋騒動 生麦事件 1862	1860年ころより、公武合体論・尊王攘夷論が起こってきました。これは対外問題が紛糾し、朝廷と幕府とが協力一致を図って、国難を処理しようとしていました。その結果、和宮（かずのみや）が、將軍家茂に降嫁しました。1863年には、尊王攘夷論が最高潮に達しましたが、8月18日の政変により、尊王攘夷論者は失脚しました。この頃より、幕藩体制の崩壊の芽が生えはじまりました。 横浜生麦では、島津久光の行列を騎馬で横切ったイギリス人を殺傷する事件が発生しまし		

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●	要 因
江戸		た。	
	長州外船砲撃 薩英戦争 1863	5月には、長州藩が外船を砲撃し、7月には、薩英戦争が勃発しました。これは、生麦事件によりイギリスは軍艦7隻を鹿児島湾に回航して砲撃を加えました。	
	8月18日の 政変 1863	薩摩藩は、長州のみの進出（討幕）を快しとせず、保守派の公家や会津藩主松平容保と結んで、京都から追放しました。（七卿の都落ち） また、この年には天誅組の変や生野銀山の変等が発生しました。	
	蛤御門の変 1864	7月に、京都を迫われた長州藩は、大軍を京都に上らせて幕府軍と戦いましたが、敗れて大阪に退きました。	
	第一次長州 征伐 1864	8月に、幕府は朝命を報じて長州征伐を行いました。11月には、長州藩は謝罪をしました。	
	4国艦隊下関 砲撃事件 1864	長州は下関を通過する4国（米・仏・英・蘭）の商船を砲撃しました。4国連合艦隊は、長州藩を攻撃し、幕府に恭順を示しました。	
	第二次長州征 伐 1865	4月に長州再征を発し、翌年6月に出兵しました。薩長はイギリス、幕府はフランスが後押しをしましたが、薩長征伐は薩長連合が成立（1866年1月）したため不発に終わり、7月にその命は解かれました。	
	〔薩長連合〕 1866	薩摩・長州の両藩が、開国・倒幕で意見が一致し、坂本龍馬・中岡慎太郎らの斡旋・調停により成立しました。なお、坂本龍馬が策定した「船中八策」は、のちの「五カ条の御誓文」や「明治憲法」の基になりました。	
明治	大政奉還 1867	10月に岩倉具視らの反幕派が明治天皇をして、徳川慶喜追討・討幕の密勅を薩長に下しました。徳川15代将軍慶喜は大政奉還を乞い、翌日勅許され、12月9日に「王政復古の号令」が発せられました。	
	戊辰戦争 1868	・鳥羽伏見の戦い ・江戸城の明渡し ・上野彰義隊の抗戦 ・奥羽越等列藩同盟の抵抗	
	〔専制政府 の成立〕 1868~1871	・五カ条の御誓文（1868）・五榜の掲示（1868）・政体書の発布（1868） ・一世一元（明治改元）・新官制（三権分立、官吏公選）・江戸を東京と改称し、東京遷都（1869）・版籍奉還（1869）・廃藩置県（1871）	

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●	要 因
明治	士族の反乱 1874～ 1876	・佐賀の乱(1874) ・熊本神風連の乱(1876) ・秋月の乱(1876) ・萩の乱(1876)	
	西南の役 1877	中央政府の士族解体・地租改正などの命令が実行されず、これを不満とした薩摩は、反政府勢力の拠点となりました。1873年に、征韓論に敗れた西郷隆盛や板垣退助らは下野しました。そして、政府の圧力と私学校生との板ばさみになった隆盛は、乱を起こしこの戦いに敗れ自殺しました。(51才)	
	[政党の 結成] 1881～1882	・自由党(板垣退助) ・立憲改進黨(大隈重信) ・立憲帝政党 ・東洋社会党 ・車界党 等	
	各地の反乱 1882～1886	・福島事件 ・高田事件 ・群馬事件 ・加波山事件 ・秩父事件 ・飯田事件 ・名古屋事件 ・大阪事件 ・静岡事件	
	[帝国憲法の 発布] 1889	1885年の内閣制度制定・1888年の市制町村制公布・枢密院の設置等を経て、大日本帝国憲法・皇室典範が発布されました。欽定(君主の命による選定)憲法の発布は、天皇制絶対主義政権の確立を意味しました。第1回帝国議会が開かれました。	
	朝鮮東学党の 乱 日清戦争 1894	4月に乱が起き、また大本営が設置されました。朝鮮国内の派閥争いが激しくなり、日本は独立党を、清国は事大党を後援した、いわゆる内政干渉によって、8月1日清国に宣戦を布告しました。日朝攻守同盟締結・黄海の海戦・旅順口の攻略・山東作戦等ありました。1895年に、下関条約が調印され、遼東半島・台湾割譲・償金2億両の措置がとられました。12月には、台湾が平定されました。1898年には、最初の政党内閣が成立しました。	
	日露戦争 1904	ロシアは北清事変以来、満州を占領し、ロシアの極東進出が目立ちはじめました。日露の国交が断絶し、ロシアに宣戦を布告しました。日韓攻守同盟締結・大連占領・満州軍総司令部設置・遼陽占領・203高地占領・奉天占領・樺太占領等がありました。また、1905年には、ポーツマス条約が調印されました。この他、日韓協約・日清条約が締結され、日本の国際的地位が向上しました。	
大正	第1次 世界大戦 1914	1912年に、明治天皇が逝去されました。(61才) 同盟軍(独・オーストリア・伊)と連合軍(英・仏・露・米・日)との戦争でした。日本は戦争景気による経済の行き詰まり打開と中国支配を独占するのに利用し、日英同盟を口実に参戦しました。ドイツに対して宣戦を布告しました。(世界大戦に参加)1915年に、中国に対して21ヵ条の要求をし、日中条約を成立させ、反日の原因を作りました。	

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●	要 因
大正			1918年にシベリアへ出兵、1919年には、朝鮮万歳事件・上海に排日運動が起こりました。1920年に国際連盟に加入し、常任理事国になりました。この頃、革新勢力が成長し、官憲の弾圧も激しくなりました。また、軍備縮小や国際会議が目立ちました。 1921年ワシントン会議・4国協定（日英米仏）、1922年日中山東条約・海軍制限条約・9国極東条約、1923年日露漁業条約、1924年シャム通商条約・日ソ漁区条約、1925年日ソ北樺太利権条約・アメリカオレゴン州の排日暴動等がありました。
	米騒動 1918		シベリア出兵の備蓄米や地主の売借しみのため、米が不足し米価が暴騰しました。米騒動により民本主義（民主主義の思想）に大きな影響を与え、以後の労働・農民運動の契機となりました。
	〔関東大震災 震災恐慌〕 1923		9月1日午前11時58分に、関東地方で起こった大地震の災害で、死者9万人・負傷者10万人・破壊焼失戸数68万戸でした。この時、戒厳令が発動されました。
昭和	山東出兵 1927		1926年に、大正天皇が逝去されました。（48才） 中国の国民革命に対し、政府は居留民保護を名目に山東半島に出兵しました。 この頃から、議会勢力が後退し、政党への不信が高まり始めました。また、中国の排日運動が激化しはじめました。1928年日ソ新漁業条約・日独通商条約・日ソ北樺太石油利権契約、1929年日中関税条約・不戦条約、1930年ロンドン軍縮条約・5国条約等がありました。
	満州事変 1931		関東軍は奉天北郊で満州鉄道の線路を爆破し、これを満州軍閥派からの攻撃だと称して戦争に突入しました。これにより、関東軍は全満州を占領しました。 全体主義の台頭や軍部勢力の増大が目立ちはじめました。また、日本が国際的な孤立化に突入しました。
	上海事変 1932		満州事変が上海に広がり、中国の抵抗と列強の干渉で成功せず、停戦協定を結びました。また、3月には満州国建国宣言をしました。
	5.15事件 1932		海軍将校が首相の犬養毅（78才）を暗殺し、軍部による挙国一致内閣が作られ、侵略戦争のコースが決定されました。1933年国際連盟脱退・日印通商条約破棄・京都大学滝川教授事件等がありました。
	2.26事件 1936		皇道派将校が近衛兵を率いて反乱し、高橋是清（83才）らが暗殺されました。これにより、軍部の手によるファシズムの道が開かれました。ロンドン軍縮会議脱退・日独防共協定の調印等がありました。

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 象 者 ○ ●	要 因
昭和	日華事変 1937～ 1939		盧溝橋事件・張鼓峰事件・武漢三鎮占領・ノモンハン事件・南寧事件等がありました。また南方への進出として、海南島占領・仏印進駐・蘭印進出等もありました。これにより、国家総動員体制がとられ、悲劇の幕が開きました。 1940年紀元2600年式典が挙行されました。
	太平洋戦争 第2次世界 大戦 1941～ 1945		日ソ中立条約成立・アメリカが在米日本資産を凍結しました。(イギリス・オランダ・インドも同様) 日本の孤立化は決定的となり、日本軍は、ハワイ真珠湾を攻撃しました。これにより、アメリカ・イギリスに宣戦を布告しました。1940年日独伊三国軍事同盟条約に調印し、列強を相手に暗い長いトンネルへと突入しました。日米交渉(8月23日～12月7日) ・マレー沖海戦 ・香港攻略 ・マニラ占領 ・シンガポール攻略 ・コレヒドール島占領 ・珊瑚海海戦 ・国際スパイ事件(ゾルゲ事件) ・ミッドウェー海戦 ・ソロモン海戦 ・ガダルカナル島敗退 ・アッツ島守備隊玉砕 ・米軍マーシャル群島上陸 ・マリアナ海戦 ・サイパン島失陥 ・米軍沖縄上陸 ・東京大空襲 ・広島、長崎に原子爆弾投下 ・ソ連が日本に宣戦 ・最後の御前会議・ポツダム宣言受諾通告・終戦の詔(みことり)のラジオ放送
	〔民主政治の 発足〕 1945～ 1949		敗戦により、占領軍の管理下に置かれ、民主政治・新憲法・制度法典の改革・政党政治の再発足・財閥の解体・農地改革等を行い、新しい日本の夜明けとして、長いトンネルから抜け出しました。 1946年天皇神格否定の詔書・日本国憲法公布(1947.5.3施行)三権分立(司法立法行政)と憲法の三本柱〔主権在民、基本的人権の尊重、平和主義(戦争の放棄)〕
	〔国内関係〕 〔国際関係〕 1950～ 1988		1950年日本の軍事基地化声明 1951年サンフランシスコ講和会議・平和条約調印・日米安全保障条約調印 1952年日華平和条約調印・インド対日平和宣言・日印平和条約調印・日米行政協定 1953年日米友好通商航海条約調印・米国間相互防衛協定交渉開始 1954年日米相互防衛援助協定(MSA)調印・ビルマと平和条約調印 1955年日米原子力協定調印 1956年日ソ漁業海難救助協定調印・日ソ復交に関する共同宣言調印 国際連合加盟加入(1957年非常任理事国) 1959年国連社会理事会の理事国・南極条約調印 1960年日米新安全保障条約調印 1962年日英通商航海条約調印 1965年日韓基本条約調印・国連安保理非常任理事国 1966年日ソ航空協定調印・基地基本法成立・日ソ領事条約調印 1968年小笠原返還協定調印 1969年日米、日ソ航空協定調印・IMF理事国に昇格 1970年核拡散防止条約調印・日米安保条約自動延長

時代 区分	合戦・乱 変・抗争	対 ○ 象 ● 者	要 因
昭和			1971年沖縄返還協定調印・中国国連加盟 1972年沖縄が復帰し、沖縄県復活・日中国交正常化・モンゴル国交樹立 1976年ロッキード疑獄事件・先進7ヵ国首脳会議（G7） 1977年領海12海里法・漁業水域200海里暫定措置法成立 1978年日中平和友好条約調印 1979年G7東京サミット 1981年北方領土の日を制定・行政改革推進本部発足
平成	〔国内関係〕 〔国際関係〕 1989～ 1997		1989年昭和天皇崩御（87才）〔大喪礼に伴う弔問外交40ヵ国〕・消費税の見直しと廃止論活発化 1990年即位式・大嘗祭举行 1992年国連平和維持活動（PKO）法案成立・自衛隊のPKO活動（カンボジア・ルワンダ等） 1995年朝鮮半島エネルギー開発機構（KEDO）発足〔日米韓協定調印〕 1996年日米政府は沖縄米軍基地縮小問題で合意・米軍基地と日米地位協定についての沖縄県民投票 排他的経済水域（200カイリ）設定閣議了解・アジア欧州首脳会議 1997年地球環境元年・地球温暖化防止京都会議（二酸化炭素削減問題等） 地球環境問題（オゾン層の破壊・酸性雨・熱帯雨林の減少・砂漠化・野生動物の減少・地球温暖化・海洋汚染・有害廃棄物の越境・発展途上国の公害等）

